不登校児童・生徒支援事例報告書（ホームページ掲載用）

校内別室「ほっとルーム」について

不登校生徒の状況

本校の不登校生徒は 23 名である。（１年３名、２年７名、３年 13 名）

そのうち、区の教育支援センターに通っている生徒は 11 名、９月から開設した「ほっとルーム」（校内別室）を活用している生徒は３名である。併用している生徒はいない。大多数が小学校時代に不登校を経験している。

具体的な取組

不登校担当教員を中心に、アセスメントに重点を置き、ケース会議を実施している。ケース会議では、担任、保護者、本人による三者面談の内容や巡回相談心理士による生徒観察の様子等の情報を収集・分析・共有し、チーム支援の必要性と方向性を確認している。

チーム支援のための校内委員会を２週間に１度開催し、支援シートを基に生徒の状況や変化を共有している。共通した対応ができるよう調整している。

不登校生徒や保護者が別室登校に対してマイナスのイメージを抱かないように名称を「ほっとルーム」とし、学校ＨＰ上で紹介している。

別室登校をする生徒が心地よく過ごせるように環境を整えている。ＳＣが勤務していない日の相談室や日当たりのよい会議室を使用している。

成果

昨年度は、別室登校の前身として相談室登校を週に２回行っていたが、本事業で週５回の別室登校が可能となり、別室であれば登校できるという生徒たちにとっての居場所づくりにつながった。

課題

依然として、不登校生徒数は多く、学校に足が向かない生徒の興味関心を、いかに引き付けるかが課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書（ホームページ掲載用）

別室指導支援委員会による組織的な対応について

不登校生徒の状況

当該生徒は、中学生１年生の時から不登校状態が継続し、教育支援センターにもなじむことができなかった。

不登校の要因は、本人及び保護者からの聞き取りでは、集団生活を送ることや良好な友人関係を築くことが難しいことであった。

具体的な取組

別室指導支援委員会を校内に設置し、アセスメントに重点を置いて、組織的な対応を行った。また、別室指導支援委員会では、教職員による協議だけでなく、生徒・保護者との対話や巡回相談心理士・スクールカウンセラー等の専門家の意見を基に支援計画を立て、学校としての支援の方向性を確認した。

週一回定期的に開催する既存の特別支援校内委員会においても、別室登校の生徒の情報共有を行っている。また、生徒一人一人の目標と到達度について、学期に一度の検証を行い、年度末には支援の継続について検討することとした。

校内別室指導支援員は、生徒の個々の状況に応じた効果的な支援のために、大学との連携を図り、臨床心理を学ぶ学生の協力を得ている。また、生徒の支援に当たっては、当該生徒・保護者との事前の協議や、別室指導支援員との情報共有を行った。

登校したら職員室で挨拶をして自分の記録ファイルを受け取る。本日の目標や学習内容を自身で決め、それを校内別室指導支援員と確認して、個々の学習に取り組む。学習の終了後は、他の別室登校の生徒と一緒にコミュニケーションの充実を図る活動を行う。

成果

当該生徒は、教室以外に通える場所と校内別室指導支援員の支援により、別室登校ができるようになった。当初は挨拶も難しかったが、顔を合わせる別室登校の他の生徒とも少しずつ打ち解け、コミュニケーションをとれるようになった。教室の授業も気になり始め、在籍学級の授業にも１日１時間参加できるようになった。

課題

学びの継続、社会的自立に向けての支援や中学校卒業後の進路相談も充実させ、進路先での新たな生活や環境に滑らかに接続・適応できるように支援をしていく。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室「ふれあいルーム」について

不登校生徒の状況

当該生徒は、教室で授業を受けることや友人とコミュニケーションを取ることが苦手となり、自宅から外に出ることが困難となった。教育支援センターを検討するに至るまでの期間、安心して通える場を求めている。静かに学習をする時間・談笑する時間を設けて「校内に自分の居場所がある」と体感している様子である。

具体的な取組

・自学自習を基本として、別室にて活動している。
・自宅から外へ出て、他者と交流できる場として設置している。
・校内別室指導支援員が在室するほか、学年教員や担任が中心となって励まし、生徒の困り具合を理解しながらやる気を引き出している。

・毎時間、生徒の活動状況を個人票に記録している。
・校内別室指導支援員からの肯定的なコメントが、生徒の励みとなっている。

・教室に足が向かない生徒が、少しでも登校できた喜び、達成感を味わえるような空間づくりを心がけている。
・支援を通して、一人一人の生徒の悩みや不安などの原因を把握し、安心して通える場を設けることを別室の目標としている。

成果

現在、利用申請している生徒は８名である。別室に通っている生徒は、一人一人が自身の体調に合わせて定期的に通えていることや生活リズムも安定していること、校内別室指導支援員とのコミュニケーションを取ることができているという成果が見られた。

課題

人員の配置が課題である。毎日開設するには、校内別室指導支援員の日程調整が困難である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室「ほっとルーム」について

不登校生徒の状況

本校の校内別室「ほっとルーム」は、現在は６人の生徒が利用している。内訳は１年生１人、２年生４人、３年生１人である。生徒の状況は、通常教室に入って学校生活を送ることは難しいが、校内別室指導支援員の見守りの下、別室における自学自習を中心とした学校生活を送る中で、内的なエネルギーを高めることができている。

具体的な取組

〇ほっとルームの常時開設

平日の午前９時から午後３時までの時間帯で二人の支援員が交代で開設している。カーテンや机、パーテーションのレイアウトを変えるなど、生徒の居心地が良くなることを目指した環境整備を推進した。

〇活動の見守り

校内別室指導支援員は、学習指導を直接行うのではなく、生徒の自学自習を見守ることを基本としている。

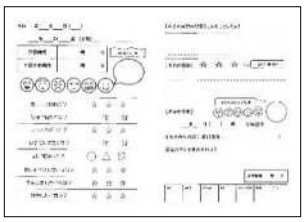
また、給食の時だけの利用を希望する生徒への対応があるなど、利用する目的は広がり、個々の生徒の事情や要望に応じた柔軟な対応で生徒の学校生活を支援している。

〇和やかな人間関係の形成

校内別室指導支援員が仲介役となり、利用する生徒同士が机を並べて、学習内容を共有したり、学年を越えて学習内容を教えたりする姿が見られている。校内別室指導支援員の無理のない働きかけにより、和やかな人間関係が生まれている。

〇日誌の記入

登校した日は、在校時間や活動状況について、簡易な日誌を生徒が記入している。生徒の日誌は、校内別室指導支援員の日誌とともに、関係教員が毎日閲覧して情報を共有し、支援の参考にしている。



成果

・校内別室指導支援員の見守りにより、利用生徒にとって安心できる場としての役割を果たしている。
・引きこもり傾向のある生徒が登校する際、最初に居場所として利用できる環境を提供するとともに、教室と別室との柔軟な往来の機会も提供している。大きな役割を果たしている。

課題

・校内別室指導支援員の働きかけは、自学自習の支援と居場所として関係づくりの両方のねらいを意識した対応が求められている。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室指導支援員の不登校生徒への対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は現在、中学校２年生や３年生である。いずれも中学校１年生の１学期後半から不登校状態が継続している。人との関係についての不安感が、不登校の主な要因となっている。本人たちは特に、同じ年代の友人などからどのように見られているのかが気になり、周りに合わせるように気を遣っていくことが負担となっている、と担任に話していた。

具体的な取組

中学校２年生の生徒は、１学期、校内別室で週１回を目標に、登校するようになった。絵を描くことが好きであることが分かり、校内別室では絵を描いて過ごした。何枚も絵を描くうちにだんだんと会話をするようになり、登校が継続するようになった。絵を描くことから数学など他の学習にも取り組むようになった。

中学校３年生の生徒は、教室への復帰はまだできていないが継続的な登校が続いている。それは、不登校対応加配教員の調整により保健室や相談室へ来ることができるようになった。人と話をすることが好きであり、校内別室指導支援員が話を聞きながら進路についての意欲を引き出し、学習への意欲を高めていった。別室登校だけでなく適応指導教室にも通うようになった。

中学校３年生の生徒は、４月に１回教室に入れた後は、不登校状態となったため、５月から別室登校が始まり、その後、学校生活支援員と明るく話ができるようになった。学習意欲が高いため、９月から校内別室指導支援員につなげ、個別指導での学習を行うと積極的に取り組み、進路の目標をしっかりともつようになった。

中学３年生の生徒は、教育支援センターに通っている。スクールカウンセラーへの相談を継続しており、その会話を通して進路への意識の向上や別室登校の友人との関係がつながり、その友人とともに別室登校ができるようになった。９月から校内別室指導支援員につなげることができ、校内別室等で学習に取り組んでいる。

成果

- 校内別室指導支援員とコミュニケーションが取れるようになった。
- 個別の対応となっているが落ち着いて学習に取り組んでいることで、学校での滞在時間が長くなってきている。

課題

個別の対応ではなく、小集団での学習ができるように、校内別室指導支援員が生徒とコミュニケーションを活発に行うことで、信頼関係を築き、小集団学習に移行していく点が課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室「ほっとすルーム」の新規設置と運営について

不登校生徒の状況

・令和５年度１０月現在の不登校出現率は、全校で 7.8%であり都の平均を上回っている。(１年生 5.1%、２年生 13.5%、３年生 6.7%)
・不登校の要因等は様々であり、一人一人課題が異なるため、ＳＣ、ＳＳＷ、心のふれあい相談員、教育支援センター、子ども家庭支援センター等様々な機関と連携し取り組んでいる。

具体的な取組

校内別室「ほっとすルーム」を設置し、平日９時から 15 時まで校内別室指導支援員が常駐した。場所は１階の一番奥で外から直接出入りできる場所に設置し、他の生徒となるべく会いたくない生徒に配慮し、安心して登校できるようにした。

「ほっとすルーム」では、自習など各自が自分で課題を決め、取り組んでいる。入室時に面談を行い、目標等設定するが、日々の心身の状態に応じて課題を決めている。生徒は一日の記録を日誌に記入し、担任に提出して下校している。

不登校生徒の生活リズムの改善、心身の健康増進もねらいの一つであるため、「ほっとすルーム」でも校内別室指導支援員や通室生徒と一緒に給食を食べることができるようにした。
養護教諭が校内別室指導支援員にアレルギー対応研修を行い、アレルギー食の対応もできるようにした。

校内別室指導支援員や他の通室生徒とのコミュニケーションの時間を取ることもできるようにした。校内別室指導支援員との会話や、将棋やコミュニケーションゲームなどを取り入れ、他者との関わりの時間ももてるようにしている。

成果

今年度、10 月末時点で 11 名の生徒が利用した。毎日登校している生徒は１名、週２～３日の生徒が２名、その他の生徒は、不定期であるが利用している。登校が安定してきた生徒には笑顔が増えてきており、心のエネルギーの回復が見られている。

課題

学習の遅れや体力の低下をどうフォローするか、ＳＣや心のふれあい相談員との連携をどうスムーズに取っていくかが課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

不登校生徒へのチームによる支援体制について

不登校生徒の状況

当該生徒は、小学生の時から不登校状態が継続中である。教室に入ることができていない。要因は、読書をしたり、パズルをしたりと一人で活動することを好み、集団行動に困難さを感じており、他者とのコミュニケーションを図ることが苦手であるといった当該生徒の思いや特性によるところが大きい。

具体的な取組

【別室（安心できる居場所）の確保】

不登校生徒が、登校した際に安心して過ごせる教室を用意した。また、１、２時間程度、学習や読書、パズルなど、本人の好む活動ができる環境を整えた。

また、図書室や相談室に通うことができるようにした。

【校内スタッフとの連携】

教員だけではなく、心のふれあい相談員やスクールカウンセラー、校内別室指導支援員等のスタッフが当該生徒と関わり、活動日誌等で情報共有を図りながら、必要な支援を進めた。また、特別支援校内委員会でも当該生徒の現状を確認し、必要な手だてについて検討した。

【給食時間を中心に据えた生活リズムの構築】

午前中に教育支援センターに通ってから学校へ登校し、給食を食べ、午後に別室で過ごしてから教育支援センターに戻るという生活リズムをつくった。併せてスクールソーシャルワーカーと連携して登校支援も継続的に行った。

【別室における定期考査の実施】

別室で個別に学習ができる環境を整えながら、定期考査も受けられるようにした。当該生徒の意思を確認した上で、受ける教科や時間を設定し、当該生徒が課題に対して無理なく進めていけるようにした。

成果

昨年度に比べ登校日が増え、ほぼ毎日登校した。滞在時間や活動内容などを自分で決め、主体的に取り組んでいる。学習については、少しずつ前向きに臨めるようになってきた。保護者も変容に気付き、状況をよりよく受け止め、協力的になってきている。

課題

今後、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れた学習や進路選択を考える機会をもち、生徒の教室復帰に向けた計画を策定する。

不登校児童・生徒支援事例報告書

不登校対策について

不登校生徒の状況

当該生徒は、現在中学校３年生で小学校より不登校が続いており、安定的な登校へつなげられていない。しかし、校内別室指導支援員を配置したことにより、定期的な迎えや安心できる大人との信頼関係を築くことで、通学への意欲が増してきている。

具体的な取組

「不登校対策委員会への参加」

心のふれあい相談員、学校生活支援員、ＳＣ、学年主任、特別支援教室専門員、校内別室指導支援員等を中心に、校内委員会を１週間に一度開催している。

「情報の共有」

不登校対策委員会だけでなく、情報をきめ細やかに共有し、定期的な面談や家庭訪問、行事への参加など前向きな参加につなげている。

「相談」

管理職や学級担任、保護者、本人による面談の内容や巡回心理士による生徒観察の様子等の情報を共有し、当該生徒との相談を実施している。

「見通しをもつ」

コミュニケーション能力に課題があるため、ソーシャルスキルトレーニング等を実施することや、進路選択等を丁寧にすることで、見通しをもった生活を送ることができるように指導している。

成果

個々の状況に応じた対応を、組織的に行うことの必要性を感じている。当該生徒に状況を聞き取りきめ細やかに対応することや、今後の見通しを丁寧に行うことが大切である。

課題

当該生徒や保護者が求めるニーズに合わせた対応を行う場合の臨機応変な校内体制の構築が課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室を活用した段階的な登校支援について

不登校生徒の状況

本校には、「教室に入りたい」と思っているものの、集団に対する不安、勉強に対する不安など、様々な事情から教室に入れない生徒がいる。そのため、教室復帰のための段階的な登校支援として、校内別室を実施している。

具体的な取組

日誌のやりとり

校内別室を利用する生徒は、登校時に専用の日誌を受け取り、その日に取り組んだ内容を日誌に書いて下校時に提出している。日誌のやり取りを通して、本人と学校が学習内容や取組の状況を共有することを目的としている。また、やりとりの際に交わされる挨拶や会話の機会を大切にしている。

学習支援ソフトの活用

校内別室を利用する生徒は授業に出られていないことから、勉強に対する自信がなく、不安感が強い。そのため、学習支援ソフトを活用することで、自分の分かる内容から段階的に学習へ取り組んでいる。自分のペースでレベルアップすることができるため、自信を得ることができている。

段階的な教室復帰

教室へ行くことが難しい生徒の中でも、「給食は教室で食べられそう」「行事に関係する授業は出られそう」など、特定の時間は出られることがあるため、その時間のみ教室へ復帰するなど、校内別室の中でも個に応じて段階的な支援をしている。

定期的な支援会議の実施

別室登校など個別の支援を必要とする生徒に対して、定期的に支援会議を開いている。支援会議には管理職や教員をはじめ、ＳＣやＳＳＷも参加し、生徒の状況の確認や今後の支援の方向性などを検討している。それぞれの役割を確認することで、効果的な支援ができている。また、保護者とも状況を共有し、連携して取り組んでいる。

成果

校内別室を活用することで、学校へ行けなかった生徒も「別室ならいけそう」と登校する大きなきっかけとなっている。また、保護者も同様に期待している。最初は別室にしか行けなかった生徒も、行事に参加できたり、授業に出られるようになったりするなど、一定の成果を得ている。

課題

自学自習のスタイルを基本としているため、基礎的な学力が身に付いていない生徒の学習習慣の確立や主体的な取組を引き出すことが課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室の取組について

不登校生徒の状況

様々な理由で、学校に登校できない生徒が複数名在籍している。ここ２、３年で不登校の生徒の人数が徐々に増加している。校内別室は、様々な問題を抱える生徒にとって選択肢の一つとなっている。

具体的な取組

＜取組の概要＞

毎週火曜日から木曜日の 10 時から 13 時までを別室登校の開室日として設定している。生徒は、開室時間中の全部または一部の時間を過ごしている。別室では、自学自習が基本であり、読書をしたり教科のワークに取り組んだりしている。給食を食べることもできるようにしている。

＜事例１＞

当該生徒は、登校意欲はあるものの、心理的要因からクラスに入って授業を受けることに困難を感じているため、別室登校をしている。教育支援センターとの併用により、ほぼ毎日登校することができている。規則正しい生活を送ることに役立っている。校内別室で給食を食べることができている。

＜事例２＞

校内別室の教室は普通教室から離れた場所に設置してあるため、当該生徒は他の生徒や教員とも接触なく登校することができている。現在、登校回数は多くないものの、今後は、登校回数を増やしたり、校内別室指導支援員と楽しく給食を食べたりすることができるよう支援を続けていく。

＜校内別室の様子＞

旧パソコン室を校内別室として、活用している。

校内別室では、扉を開けても廊下から見られないよう衝立を立てる配慮をしている。

成果

別室登校のニーズは以前から多く、その要望に応えることができた。

９月は、８人の生徒が校内別室を利用した。そのうち、のべ６人が校内別室で 13 時まで在室し、給食を食べることができた。

課題

より多くの不登校生徒に利用してもらい、居心地の良い場所とするために、校内で取り決めた制度をよりよく改変していくことが必要である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室における活動について

不登校生徒の状況

当該生徒は、中学校１年生であり、小学校６年生のクラス替えで友達関係を築くことができず不登校となった。その後適応指導教室に入室し、小学校卒業まではほぼ毎日通室していた。中学校には登校する気持ちがなく、標準服等も購入していなかった。

具体的な取組

アセスメントでは、当該生徒が学習面での遅れを気にしているということが分かり、当該生徒へ校内別室指導支援員がいることを伝え、別室登校ができるようになった。別室指導支援員との面談で自分に合った課題を探し、その課題に繰り返し挑戦することで、できた時の達成感を味わうことができ、自分の自信につなげることができた。

不登校生徒が落ち着いて登校し、学習できる環境の整備を行った。個々に落ち着いて学習ができるようにブースを設営し、生徒の緊張をほぐすレイアウトを施した。生徒の学習への興味・関心を促進するための、習熟度・教科別学習課題の提供、デジタルコンテンツの表示を行い、タブレットの活用を促した。

別室と在籍学級をオンラインでつなぎ、授業を実施した。当該生徒は、授業の様子を視聴することで、在籍学級の友達の様子もイメージできるようになり、在籍学級への興味をもつことができるようになった。視聴の際には、校内別室指導支援員の声掛けもあり、在籍学級に行くことへの不安も概ね解消することができた。

別室の登校について、担任が連絡し次週の予定を聞き、職員室の専用ボードに名前を記入し、職員間で共通理解を図っている。登校・下校時は当該生徒が職員室に自分で報告することになっているが、校内別室指導支援員が付き添い報告することで自信につなげている。

成果

中学校に全く興味を示さなかった当該生徒が、6 月から週に 1 日から 2 日登校できるようになった。2 学期には在籍学級に入る意思を見せ、いくつかの教科の授業を受けることができるようになった。

課題

当該生徒は登校の約束をしていても、来られない時もある。より多くの授業を受けられるように、苦手意識を克服するよう支援していく。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室登校支援について

不登校生徒の状況

当該生徒は中学校２年生で、中学校 1 年生の１学期から不登校傾向が強くなり、継続的に登校するが別室で過ごしていた。当該生徒は、内向的な性格で対人関係を築くのが苦手としており、絵を描くことや読書を好んでいる。本校には、同じ小学校からの入学者が少なかったため、友人を作れず１年間を過ごした。

具体的な取組

＜情報共有＞「不登校」の生徒を、学校全体で支援していくことを前提に、「チーム」として情報共有を行い、支援のアセスメントを実践した。
・定期的な情報交換（例：校内特別支援委員会で管理職・特別支援教育コーディネータ・特別支援担当教員・ＳＣ等の報告）
・校内別室指導支援員同士や担任との情報

＜支援計画＞
「心のリハビリ」を念頭に「あせらず・とがめず・きめつけず」の方向性で、各学期を基準に長期的かつ段階的にスモールステップで実施する。
【第一段階】別室での継続的な登校
【第二段階】特定の教科のみ授業受講
【第三段階】教室内での授業

＜不登校から登校へのステップ＞
①毎日継続的な登校
（登下校の際、職員室に立ち寄る）
②集団の規則性や時間的拘束から解放
（別室での学習・作業の許可）
③日常の生活リズムの安定
（給食を基準に前後を活動時間とする）
④主体性・自己肯定感の醸成
（小さな事柄でも自ら主体的に取り組めたことは称賛する）

＜具体的対応＞
・自ら選んだ教科を別室で対応
・入試用面接練習や作文指導を受ける。
・適応教室の登校を基本とし、苦手教科のみ教科担当に個別指導を受ける。
・学校行事や学年行事には本人の意思確認をした上で、できる限り参加させる。

成果

・ある生徒は別室登校当初、無表情で読書や絵を描いていたが、現在は毎日継続して登校し、給食までの間、自ら選んだ教科で自習している。
・自らの不登校の現状を客観的に把握・分析し、今後何に取り組むか、課題を説明でき始めている。

課題

・各段階から次の段階へ進む際、時間を必要とする。
・不登校の要因が教員や教科指導にある時、対処方法や本人の意識改革が難しい。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室指導支援員を活用した不登校対応について

不登校生徒の状況

本校「My Class」の対象生徒は、校内特別支援委員会が必要性を認めた生徒である。当該生徒は、中学校２年生の男子で、小学校４年生から登校しぶりがあり、６年生２学期より不登校状態が継続している。不登校の要因は、保護者からの聞き取りでは、当該生徒が「学校に行こうと思わない」ことにある。保護者は登校刺激を行えていない。

具体的な取組

教室復帰が難しい不登校生徒の、校内における居場所を確保する。まず、特別支援教育コーディネーター・不登校担当教員を中心に、特別支援委員会において、担任、保護者、本人による三者面談の内容や巡回心理士による生徒観察の様子等の情報を収集・分析・共有し、チーム支援の必要性と方向性を確認した。

当該生徒は中学生１年時から、不登校対応加配教員の行う校内別室に出席できた。中学生２年生に学年が上がり環境が変化するタイミングで、頑張れると思える授業については出席しようとする気持ちが本人に芽生えた時機を捉え、ＳＣとの週１回の面接は継続しつつ、本人の気持ちに沿った柔軟な別室登校の活用を促した。出席数も増え、授業に出られるようになった。

常駐する校内別室指導支援員は、学習指導をしない。挨拶をして健康観察をした上で、生徒がその時間にやろうと思っている学習内容を確認したら、基本的に同じ空間にいて「見守る」ことを役割としている。学校に、自分のことを受け入れる空間があり、そこでは安心して学習に取り組めると生徒に感じさせたいと思っている。

別室指導は、月曜から金曜までの３時間目と４時間目を校内別室指導支援員の常駐する枠とした。当該生徒に、普段渡せないでたまっていた配布物や課課題を、担任から預かり、登校時に渡すなどの対応できた。

成果

校内別室指導支援員の常駐時間に加えて、不登校対応加配教員の担当する火曜と木曜の２時間目と５時間目の枠を合わせると、長期不登校生徒のための別室対応として週に 12 コマが確保でき、より手厚い対応が可能となった。

課題

学級担任を通して本取組について御家庭に周知し、不登校生徒およびその保護者に寄り添った取組としていくことが課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室指導支援員との連携について

不登校生徒の状況

当該生徒は中学校２年生である。小学校時は登校できる日と休む日を繰り返していた。中学入学後からは、不登校状態が続いている。本事業開始後、保護者へ周知し、保護者が当該生徒へ本事業を伝えた。当該生徒も興味を示し、月に数回来室することができている。その流れで別室登校から教室へ行くこともあった。

具体的な取組

【見守り】

・校内別室を利用するにあたって、保護者が当該生徒について、校内別室指導支援員に知っておいてほしいことを所定の用紙に記入した。その内容を基に校内別室指導支援員は生徒の特性等を把握して見守ることとしている。

【連絡】

・保護者からの欠席等の連絡を受ける。

・生徒が学校に到着した際と、退室の報告を保護者にする。当該生徒の情報共有を密にして支援を行っている。

【声かけ】

・生徒に関する情報が記載されている用紙を基に、支援員は生徒の得意なことや苦手なこと、あるいは触れられたくない内容を把握した上で、コミュニケーションを図り支援ができるようにしている。

【報告】

・来室した生徒に関する以下の情報を管理職に報告し次の支援につなげている。

①来室時間

②退室時間

③様子、活動内容

成果

・保護者へ案内を周知して利用する家庭が少しずつ増加している。

・生徒本人が継続して利用し始めている。

・別室登校から教室へ行く生徒がいた。

・不登校生徒の居場所が教室以外に設けられた。

課題

・事業が開始して日が浅く、保護者全体に認知されていない。

・校内別室指導支援員を含めた校内体制の構築に時間を要する。

不登校児童・生徒支援事例報告書（ホームページ掲載用）

ココカラルーム（校内別室）の利用について

不登校生徒の状況

当該生徒は、中学校２年生であり、１年生半ばから欠席が増えた。起立性調節障害と診断を受けたが学習に対して強い意欲があり、オンライン授業に参加をしていた。別室に登校した際、休み時間に廊下などで友人と会話をすることはできるが、教室など大人数の人がいる場所には不安で入ることができなかった。

具体的な取組

学習への取組

学習に対して強い意欲があったため、学校に登校でき、別室ではあるが「学校で学習を行うことができた」ということが本人の自信につながった。校内別室では、教科担当が課題を提示し、取り組むことができた。

定期的な面談

学校に登校することができているため、担任、学年の教員と定期的に面談をすることができた。保護者とも面談を行い、当該生徒・保護者ともに校内別室指導支援員、学校と良好な関係を築くことができた。

級友のサポート

担任が校内別室指導支援員と連携を図り情報共有ができているため、当該生徒の状況を随時把握することができた。休み時間等に級友が校内別室に顔を出し、交流を取ることができた。

多様な関わり

校内別室指導支援員とともに校内別室内で学習や軽作業を行った。他の利用生徒と交流し様々な関わりをもつことができ、表情が豊かになった。

成果

学校との関係が途切れることなく、登校し続けることができ、教室に復帰することができた。しかし、集会など大人数での活動になると不安が強くなってしまうため、今後もスモールステップでできることを増やしていく。

課題

校内別室指導支援員の勤務時間をフルタイムにできると、別室に通う生徒が希望する授業に参加できるなど、柔軟な対応ができる。

不登校児童・生徒支援事例報告書

居場所（ステップルーム）設定と支援員の有効活用について

不登校児童の状況

当該児童は小学校４年生であり、不登校傾向の始まりは友達関係の不安による困り感を言葉で表現できなくなったことが一つの要因であると捉えている。また、当該児童は、集団行動が苦手であり、友人関係の不安などから体調を崩すことがある。

具体的な取組

【児童の実態に即した支援員の配置】
児童の実態に即した校内別室指導支援員を配置することで、児童はその支援員が勤務する日を心待ちにし、一緒に学習することに喜びを感じ、その後学習の意欲向上につながった。

【一緒に体を使って活動する支援】
教員にはなかなか思っていることを言葉で表現できない児童も、スポーツを通して、好きな支援員と一緒に、体育館が空いているときに一緒に体を動かしながら会話を交わしていくことで、表情が明るくなった。

【小さな学習のつまずきに気付く支援】
学習のつまずきの一つ（具体的なノートの使い方）を個別に繰り返し指導したことにより、見やすいノートづくりを通して学習したことを整理できるようになった。そのことにより、学習への意欲がわき、主体的に学習するようになった。

【学習とともに会話を大事にする支援】
集団になじめない児童が、校内別室指導支援員の個別対応で、学習だけでなく、日常的な会話をすることで、自分を理解してくれる大人がいる安心感を得ることができた。そのことを通して落ち着いて学習に取り組めるようになっている。

成果

・自分の居場所と安心して話せる人ができたことで、当該児童の登校日数が増えた。
・適切な助言により学習に自信が持てるようになった児童もいる。

課題

・校内別室指導支援員が毎日勤務できているわけではないので、毎日個別指導・支援ができる人材がいるとよりよい。
・この事業は２年間と決められているが、継続していくことで、確実に不登校傾向児童を減らしていけると考える。
・教材を準備する予算、家庭訪問できる制度があるとより充実した不登校児童への指導・支援がなされる。

不登校児童・生徒支援事例報告書

別室指導支援委員会による組織的な対応について

不登校児童の状況

当該児童は小学校４年生であり、１学期後半から登校しぶりが見られた。不登校の要因として、当該児童の不注意を教員から叱責されたことが直接的な原因であるとの訴えがあった。１学期はなんとか登校することができたが、２学期が始まって登校しぶりが再開した。

具体的な取組

別室指導支援委員会を設置し、担当を中心に組織的に対応した。まず、別室指導支援委員会にて当該児童の支援方法について協議し、学校としての方向性を確認した。当該児童に対するアセスメントをＳＣの助言のもと行い、情報を共有・確認しながら対応策を決定し、個別の支援シートを作成した。

校内別室指導支援員は、大学で臨床心理学を学ぶ学生が務めており、大学教授とも連携しながら進めている。

また、支援に当たっては、当該児童のこれまでの経緯や特性、保護者の要望などを校内別室指導支援員と情報共有をしながら支援を行っている。

別室指導支援委員会の他に、生活指導部会においても、別室登校の児童の情報共有を行っている。また、当該児童の目標と到達度について、学期に一度の検証を行い、年度末には支援の継続について検討することとした。

校内別室指導支援員は担任と課題について共有し、支援に当たっている。１日の学習内容や何をどこまでやるのかについて、児童が自分で決められるよう校内別室支援員がアドバイスしている。他の児童とも一緒にコミュニケーションを図る活動も行っている。

成果

当該児童は別室で大人の支援があれば登校できることから、支援開始から校内別室指導支援員と一緒に学習に取り組むことができている。音楽や図工、体育の授業は参加できるようになり、成果が表れている。

課題

教室での様子や学習の進度について、校内別室指導支援員も把握できるような情報交換シートを作成し、対象の児童が教室へスムーズに入れるようにしていく。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室登校支援「ひびきルーム」について

不登校児童の状況

学級集団の中では息苦しさを感じるが、登校への意欲があり、実際に相談室には登校できる児童やごく短時間だけなら登校できる児童、人のいない放課後なら登校して担任と関わることができる児童ら８名(2 年生～6 年生)が本校の校内別室を利用している。そのうち７名は前年度以前から、長期にわたって不登校が続いている児童である。

具体的な取組

＜学習課題の計画的な用意＞

担任が学習プリントやドリル教材、図画工作科・家庭科作品の制作など、各児童の意欲や能力に合わせた課題を用意している。児童は担任に「連絡ノート」を用いて日々の取組を伝え、評価や助言を得ている。また、「ひびきルーム」利用の児童が相互に教え合う姿が見られる。

＜給食の時間は他者とつながる機会＞

給食は教室に取りに行くかクラスメートに配達してもらっている。給食を取りに行った際に誘われてそのまま教室で給食を食べることもある。また「ひびきルーム」で給食を食べながら「おいしいね」、「温かいね」、と共感し合うことはそれだけで楽しく安心できる時間になってい

＜活動の場の拡大＞

学校生活支援員や専科教員が担任とともに児童に言葉を掛け、図工室や家庭科室、校庭、学校園(畑)など、校内各所での活動を促している。学年に応じた体験活動や制作物の持ち帰りは、児童に達成感をもたらすだけでなく、保護者の安心材料になっている。

＜楽しい集団活動の機会の設定＞

学校行事等で開室時間が短く、学習への取組が進まない日などは、校内別室指導支援員が主導で簡単なゲームを紹介したり、ＳＳＷがヨガを教えたりして集団活動の機会を設けている。

成果

・開室前と比較し８人中５人が継続登校し、登校時も不安な様子や母(父)子分離不安がなくなった。
・大人が介在する小集団活動が、自然なＳＳＴ（ソーシャルトレーニング）になり、場に応じた適切な行動ができるようになった。

課題

・週２回の限られた時間のため、一日一人の支援員配置で、効果的に登校支援を行えるようにしていくこと。

不登校児童・生徒支援事例報告書

「ステップアップルーム」の活用

不登校児童の状況

当該児童は現在小学校６年生であり、４年生から感染予防と心理的な理由で欠席が増えた児童である。５年生のときは、出席は数日で、放課後、担任と定期的に面談してきた。６年生では放課後の来校から、午前中の別室登校につながった。

具体的な取組

本校は、全学年学級編制替え、担任替えを行っているが、当該児童については担任との関係構築を大切にするために、あえて担任を５年生と同じ教員にした。

別室登校では、
① 登校だけ
② 別室での活動時間の延長
③ 別室での給食
④ 学級活動等への参加
と、段階的に活動の量と質を高めていった。

別室登校が徐々に定着し、月・水・金曜日に安定して登校できるようになった。別室を利用する同学年や他学年の児童と会話を交わす機会をつくることで、当該児童が学年や学級の情報を得ることができた。

成果

・１学期末には学級会に参加することができ、自信につながった。
・２学期には、卒業アル」バム用のグループ写真撮影を始め、２泊３日の移動教室にも参加することができた。

課題

・移動教室参加はかなりの前進と思われたが、別室登校は続いている。今後も粘り強く取り組んでいく。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室指導支援員を活用したチーム支援について

不登校児童の状況

当該児童は、小学校５年生である。発達に特性があり、そのことで本人の自己肯定感が低くなり、学校生活全般で不適応の状況となって現れている。不登校の未然防止の観点から、児童の自己肯定感を高める支援を重点として別室支援を中心に全校体制で支援にあたり現在に至っている。

具体的な取組

当初は、生活支援員を配置していたが、あまり効果がなかった。「学校内全体が教室」である共通理解のもと、児童の心根に共感することを全教職員で組織的に粘り強く関わった。校内別室指導支援員は当該児童にそばにぴったりつくのではなく、本人の自尊心や自立心を高めるように、さりげなく関わっていった。

校長自らが校内研修の講師を行い、教職員は当該児童について「特別な支援を要する児童」ではなく、「特別な才能を有する児童」と意識の転換を図った。さらには、才能教育を実践する専門家を招聘して、事例研修会を行い、才能開発教育の視点に基づく支援の在り方を共有した。

校内別室指導支援員に対しては、そのノウハウの基本となる「笑顔で肯定的に関わる」を支援の基本として関わるよう助言するとともに、「家族同然」の心根をもって関わるように、管理職、学級担任や特別支援教育コーディネーター、特別教室専門員から具体的なコンサルテーションを行った。

保護者の思いに寄り添い、「我が子同然」の思いで共感をしていくことに徹していった。学校への信頼が高まり、保護者の表情が和らぐことに伴い、児童も少しずつ安定していった。

別室支援教室

成果

現在、当該児童は不登校になることはなく、学校生活を送っている。学級での授業に参加する機会も徐々に増えた。行動班のリーダーとして宿泊行事に参加したこと、大きな記念式典で立派な態度が見られたことは画期的な成果と捉えている。

課題

中学校に向けて、スムーズな接続ができるように、中期的な視野に立って、関係機関も含めて支援をしていくことが求められる。